

りょうぜん天蚕の会だより

【第 11 号】



発行責任者 りょうぜん天蚕の会 会長 菅野秀一 (電話・FAX 024-586-3030)

立春の候、皆様には益々ご健勝のことと存じます。平成17年2月に設立した「りょうぜん天蚕の会」はこの度11年目を迎えました。これも偏に会員皆様の熱心な活動と関係機関のご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

当会の活動は、霊山の豊かな自然環境を活かし、野蚕である「天蚕」の育成と、その飼育体験交流や独特の風合いをもつ萌葱色の繭・絹糸の新たな加工や商品化による地域特産品の創成をはかり、活力ある地域づくりを推進しようとするものです。

設立以来、これまで伊達市、伊達市観光物産協会、大日本蚕糸会、福島県関係機関等のご支援をいただきながら、会員一丸となって繭の生産、新商品開発に取り組むとともに、小学校等への観察用天蚕配布、県内外天蚕関係者との交流及び展示PR活動等を行っております。

26年度は異常気象が影響し繭の収穫量は約6,000粒で前年より減収となりましたが、新たなデザインのハンドバックが完成するとともに、和服一着の縫製を成就し、展示会において多くの関係者から賞賛をいただきました。

特筆すべきは、当会設立10周年記念式典を霊山こどもの村を会場に挙行し、会員一同一層の発展を誓ったところです。

なお、惜しまれる出来事として、当会会長として設立から今日まで10年間の長きにわたり活動を導いてこられた柳沼泰衛会長が4月14日に急逝されました。養蚕の再興にささげられた81歳の人生でした。心からご冥福をお祈りいたします。

27年度は柳沼泰衛会長の遺志を引き継ぎ、これまでの成果と実績を基にさらなる前進を図る所存でありますので皆様のご支援ご協力をお願いいたします。

10月25日
設立10周年
記念式典開催霊山子供の村
児童館ホール

柳沼泰衛会長逝く

当会会長として設立から今日まで10年間の活動を導いてこられた柳沼泰衛さんが4月14日に逝去されました。県職員として蚕業試験場長、繭検定所長務められ、養蚕の振興にささげた81歳の生涯でありました。

「天蚕は山の神の贈り物。大切に育てなければならない」「地域の誇りを取り戻そう」と天蚕に魅力を持ち、早くから研究されて萌黄色した繭の利活用と生産普及を目指し「りょうぜん天蚕の会」を結成し今日に至りました。この功績は誠に偉大であります。ご冥福をお祈りいたします。

追 想 ふくしま びと

蚕に寄り添い続けた人生だった。日本で初めて養蚕伝習所が開設され、明治以降、国内養蚕業の先進地として栄えた旧靈山町で、祖父の代から続く養蚕農家に生まれ、蚕は幼いころから身近な存在だった。県職員となり蚕業試験場長、繭検定所長を務めた。自宅でも蚕が頭から離れることはなく、妻信子さん(73)は「わが子のように大事に扱って、とにかく夢中でした」と振り返る。退職後、日本原産のヤマユガの野蚕・天蚕の復活に取り組み、2005(平成17)年に「りょうぜん天蚕の会」を設立。「繊維のダイヤモンド」とも呼ばれるもえぎ色の美しい糸から数々の商品を生み出した。開発したシヨールは12

元県蚕業試験場長
りょうぜん天蚕の会会長

柳沼 やぎぬま

泰衛さん やすえい

4月14日
81歳(細菌性肺炎)

蚕に寄り添い続けた人生

年、天蚕では全国で初めて日本絹業協会から純国産絹マークの使用を認められた。柳沼さんが病床の傍らに置いたシヨールはひつぎにも納められた。「蚕と一生を共にした人。きつと喜んでくれたでしょう」と信子さんは涙ながらに語る。同会は4月29日から活動を再開した。設立時から関わる事務局長の八島利幸さ



養蚕の復活による地域振興に尽力した柳沼さん(左)。右は妻信子さん=2011年

■1933(昭和8)年、伊達市(旧靈山町)生まれ。東京農工大卒。県蚕業試験場長、県繭検定所長を歴任。退職後に「りょうぜん天蚕の会」を設立、会長を務めた。元靈山町選挙管理委員長。

(県北支社・酒井来武)

天蚕の山付作業を実施

4月29日9時から館ハウスにおいて会員21名が参加して山付作業を行った。作業前に14日に亡くなった柳沼会長に黙とうをささげ、遺志継承を誓い、若葉が萌えるエゾノキヌヤナギの枝に約20,000粒の卵を種付けした。

柳沼会長の遺志継ぎ風評一掃を
「天蚕」活性化に決意新た
 霊山の団体10年目の種付け作業



高品質の繭を生み出す天蚕(てんさん)による地域おこしが十年目に入った「りょうぜん天蚕の会」は二十九日、伊達市霊山町中川の飼育ハウスで種を樹木に取り付ける作業を行った。十四日に亡くなった柳沼泰衛会長の遺志を継ぎ、放射線の風評に負けない繭を新たに生かした。

菅野秀一副会長(左から)は約二十人が参加した。作業前に故柳沼会長に対し、全員で黙とうをささげた。会員は害虫などから守るため小さなネットの中に約二十粒の卵を入れ、幼虫のエサとなるエゾノキヌヤナギの枝に固定した。本来はクヌギだが、エゾノキヌヤナギの葉の方が飼育しやすいという。

全部で約二万粒に上る卵「ド」と呼ばれ珍重されている。種付けし、ハウスのネットを掛けた作業を分担しながら行った。卵は約一週間であら化した後、ネットをくぐり抜けてヤナギの葉を食べ始める。東京電力福島第一原発事故による風評被害にさらされたが、故柳沼会長は逆境に屈せず会員を励まし続けた。

天蚕の会は平成十七年二月に発足し、今年で十年目の節目で会員に動揺はあるが悲しみを乗り越えていこうと決意を固めている。柳沼会長の言葉「天蚕は山の神の贈り物」という会長の言葉を胸に、活動を続ける」と意気込んでいます。

菅野副会長は「柳沼会長は今年で十年目の節目で会員に動揺はあるが悲しみを乗り越えていこうと決意を固めている。柳沼会長の言葉「天蚕は山の神の贈り物」という会長の言葉を胸に、活動を続ける」と意気込んでいます。



エゾノキヌヤナギに天蚕の卵を種付けする会員

福島民報新聞 4月30日(水)

今月亡くなった会長の遺志継承
「天蚕の会」活動再開
 伊達 飼育ハウスで種付け



伊達市のりょうぜん天蚕の会は29日、同市霊山町の天蚕飼育ハウスのネット掛けや天蚕の種付け作業を行った。今月亡くなった会長の柳沼泰衛さん(享年81)の思いを引き継ぎ、活動を再開した。

市内外の会員約20人が参加。柳沼さんに黙とうをささげ、作業に入った。

この日は約20棟のハウスのネット掛けと、天蚕の餌となるエゾノキヌヤナギに天蚕の種付けを行った。

副会長の菅野秀一さん(63)は「柳沼さんは会のシンボルであって指導者、研究者として立派な人だった」としのび、「遺志を引き継いで会を発展させていきたい」と語った。

天蚕の種付け作業を行う会員ら

福島民友新聞 4月30日(水)

各地で天蚕繭工芸品づくり

6月19日午後1時より、石戸地区交流館において「天蚕繭を利用したコサージュづくり」の講師を八島恭子会員が務めた。高齢者ふれあいサロン事業「石戸いきいきクラブ」のメンバー24名が集いそれぞれコサージュづくりに挑戦した。

また、6月22日午前10時から11時半まで、大石小学校親子ふれあい「繭工芸品づくり」の講師を務めるなど町内各地において繭工芸品づくりが盛んに取り入れられた。



繭の収穫作業

7月13日午前9時より繭の収穫作業を行った。会員24名、男子は収穫、女子は繭の枯葉取など上・中・下の選別作業を行った。作業途中で雨のため中断、4棟の収穫を残した。

今年は梅雨の長雨や多めに山付したので飼料不足を来とし、幼虫の移動など数々の作業手間をかけたが収穫が少なかった。適正な放育数等の研鑽が待たれるところである。



臨時総会開催 菅野秀一氏を新会長に選出

7月13日午後1時より柳沼泰衛会長の突然の逝去により空白となっていた会長を選出するため臨時総会を開催した。その結果、出席者全員の推薦により菅野秀一氏が選出された。

先の役員会において菅野副会長を推薦したが、菅野氏は「養蚕業に精通し、業務の見識と蚕業関係に人脈を有する方が好ましい。」又「環境省の現職員として福島復興事業に携わっており多忙な毎日である。」とのことから強く固辞された。しかし、柳沼前会長の遺志を速やかに実行する必要がある、役員諸氏から会員全員で支えていくことと了承された。

新役員は次のとおり。また、新会員7名が登録された。

新役員 会長 菅野秀一、副会長 瓜田章二、
幹事 柳沼信子、幹事 八島時男

新会員 佐藤ますみ(本宮市)、佐藤浩子(いわき市)
林志津(いわき市)、日向寺ツヤ子(いわき市)
鈴木みどり(いわき市)、有馬俊子(いわき市)
菊田政信(福島市)



設立10周年を盛大に祝う

10月25日午後、霊山子供の村児童館において、設立10周年を祝った。大日本蚕糸会常務理事安藤俊幸氏、日本野蚕学会会長赤井弘氏を初め、県農林水産部園芸課長、県ハイテクプラザ福島技術支援センター所長他来賓12名を迎えて盛大に開催した。

菅野秀一会長は「本来ならば柳沼泰衛前会長が挨拶すべきところであったが誠に慚愧に絶えない。残された会員一同が柳沼氏の意志を受け継ぎ更なる発展に尽くしたい」と述べた。

安藤常務理事は「りょうぜん天蚕の会が制作したハンドバッグのクオリティの高さが評価されて純日本絹マークの認定に至った」と祝辞を述べられた。また、市長代理の三浦産業部長は「伊達市の新たな特産品になってきており伊達市の誇りである」との讃辞を贈られた。瓜田章二副会長が「福島・伊達を支えた蚕糸業の歴史」と題して記念講演を行った。

式典修了後の会場で福井県から駆けつけてくれた山本真美さんのハーブコンサートがあり華やかな演奏を堪能した。又、祝賀会に先立ち、りょうぜん紅彩館ホールにおいて山本さんの夫倫博氏、石渡宏氏に加えて菅野公会員がフルート演奏を行って紅彩館一般利用者からも大きな喝采を浴びた。

祝賀会で日本野蚕学会会長赤井弘氏は挨拶の中で「天蚕の未来像として医薬と化粧品に活路が開ける」と新生物研究者として断言された。宴会の最中に当会が誇る「天蚕音頭」を女性の皆さんが踊るとアンコールの声が湧き上がり再舞踊となった。

その直後、宴会場の窓に天蚕らしき蛾が舞っているのを発見、会場に招き入れたところ、宴会をそっちのけで蛾に注目が集まりカメラのフラッシュ音が沢山起きた。その後更にもう一匹舞いこみ「会長の代わり」「会長も混ざりたかった」「会長喜んでいる」という声があった。蛾は「ウスタビガ」という野蚕の一種であって思わぬハプニングに会員一同感激に包まれた宴会となった。



掛田まちなかサロン「ヨッテミ」と霊山町文化祭に展示

10月29日～31日まで、掛田商店街に伊達市賑わい創世の一環として建てられたサロン「ヨッテミ」(旧栗野屋跡)のオープニングの展示品として当会の天蚕品を飾った。同時に「天蚕コサージュづくり」を開催し八島恭子会員と大友靖子会員が指導に当たった。

また霊山町文化祭の展示要請に応じて「天蚕商品」の展示を11月1～2日の2日間行った。

初公開の天蚕の着物に来場者は一様に「大した物だ」

「目の保養になった」という発語が多く聞かれた。

「町の宝になるので頑張っていて欲しい」という励ましも頂いた。

新製品の箱型ハンドバッグと和洋兼用になるハンドバッグは大変好評であったので量産体制を整えたい。



ヨッテミの展示(写真 上)

新製品の箱型ハンドバッグ(写真 下)

ハウスネット撤去作業と大反省会開く

1月30日午後、今年最後の共同作業ハウスネット撤去を行った。作業後10周年記念式典も含めた反省会を行った。撤去作業には男子会員10名、蚕種の袋詰め作業と調理に男女6名の参加を得て無事終了した。



反省会には会長より記念式典での労いと感謝の辞があった。また、瓜田副会長からは蚕糸科学研究所における天蚕紬とふい絹のコラボによるショートショールの作品が非常に高く評価され、当会の技術力が評判になっているとの報告があった。



八島事務局長からは式典・祝賀会に参加された方々からの感謝の手紙が披露された。また記念品として天蚕ロゴマーク入り萌黄色のTシャツが配布されて宴会に入った。

(写真 新デザインのTシャツ)

檜(ナラ)・柵(クスギ)の剪定作業を実施

1月17日午前9時より男性会員6名が参加して飼育ハウスの檜・柵の剪定作業を行った。移植して以来本格的な剪定をしていなかったため枝がネットを突き出す程に成長していた。剪定作業を始めると取り残された繭が一本に一個平均付いていた。中には綺麗な色で残っていたのもあった。

収穫時何人もの目で見て回収したにも拘わらず、残さず収穫することは至難の業であることを自覚させられた。



ふい絹と天蚕糸（紬）のショール

瓜田副会長の勤務する大日本蚕糸会「蚕糸科学研究所」より提供された「ふい絹」＝家蚕繭を一度に200～300本繰糸した太い糸に撚りを掛けずに纏めた糸＝を経糸と緯糸にも用い、天蚕の紬糸を等間隔に用いて織りあげた。生糸の白色としなやかさに天蚕紬の萌黄色が加わり上品な気品を伺わせる作品となった。



八島事務局長が蚕糸科学研究所に持参し織の特色を説明するまでもなく、所長初め職員からも「綺麗で家蚕・天蚕双方の長所が際立つショール」と歓声が上がった。これにより、ふい絹砧打ち糸を更に提供していただけることとなった。(写真)



瓜田副会長 養蚕振興セミナーで講演

2月5日(木)JA福島ビル大会議室において平成26年度養蚕振興セミナーが開催され、瓜田副会長が「福島・伊達を支えた蚕糸業の歴史とりょうぜん天蚕の会事業活動」と題し基調講演をした。参加された大勢の養蚕農家は天蚕による会の活動に強く興味を示されていた。



福島民友新聞 2月6日(金)

純国産「宝絹」試作品展に出席

2月6日(金)東京ジャパンシルクセンターで開催された宝絹試作品展に八島事務長と八島恭子会員が出席した。

蚕糸・絹業提携グループ個々の技術を生かした新分野の製品の開発、各グループがコラボレーションすることでお互いの技術が融和した作品や復刻デザイン製品等が創作されたもので、約10団体の出展があり見事な出来映えであった。

何れは当会製品の出展を期したい。

純国産 宝絹 試作品展のご案内

蚕糸・絹業提携グループ個々の技術を生かした新分野の製品の開発、各グループがコラボレーションすることでお互いの技術が融和した作品や復刻デザイン製品等を展示しました。

◎作品の展示
2月 2日(月)～5日(木) 10:00～18:00
2月 6日(金) 展示日 10:00～16:00
◎実演・体験 (10:30～16:00)
絹プレスレット 2月2日(月)
絹クラフト 2月3日(火)～6日(金)

◎出展者
純日本絹文化協会(伊と幸)・日本の絹を守る会(西陣まじづる)・平塚絹グループ(平塚絹織)・白糸絹1号プロジェクト関係チーム(マミシバ)・亀岡絹織物研究所(亀岡絹織物協賛施設)・豊田オリジナル織物(九万平織)・群馬絹織物株式会社(九三六シヤ)・鶴の会(くまがた)プロジェクト(西尾絹織物)・近江絹織物協会グループ協議会(近江産加賀)・信州産ブランド絹物協賛会(シシセイ)

一般財団法人 大日本絹糸会 ジャパンシルクセンター 蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会

天蚕母蛾検査を実施

2月15日9時から中川集落センターにおいて会員15名が参加し天蚕母蛾検査を実施した。伝染性病原菌に冒されていないか優良種保存には欠かせない重要な作業である。

今年度は瓜田副会長の直筆テキスト「母蛾検査の必要性和検査方法」を基に、新たに厳選された本格的試験機器、検査液により作業が実施された。



試験献体は約150体。検査の結果1体において疑わしい物が発見され、即破棄処分とした。検査の重要性を再認識したところである。

【混合試薬水】

- 1.精製水 500cc
- 2.炭酸カリウム 2.5g で混合
- 3.1匹当たり 12cc

恒例「天蚕まつり」開催

10月4～5日、阿武隈急行保原駅において「天蚕まつり」を開催した。当会と伊達市観光物産協会の共催により10月3日（てんさん）頃に開催している。会員23名が出席し来客に対応した。

今年は仮縫い状態の天蚕の着物(写真)が初公開され、訪れる人の注目を浴びた。

また、体験コーナーも開かれ、一粒の繭から糸を紡ぐ糸づくりや、天蚕の繭を使ったコースジづくりも実施され、女性の人気を集めた。



(福島民友新聞 10月5日)

機織り機修復と後継者養成に伊達市より支援金

かつて世界に名を馳せた「掛田折り返し糸」「伊達蚕種」等の養蚕地として市の特産品として当会の「天蚕製品」に注目している。機織り機（修復された機織り機）は石森会員が

自宅に置き新たに織姫を目指して織の勉強に挑戦することになった。



新人紹介



佐藤ますみさん
(本宮市)



佐藤浩子さん
(いわき市)



林 志津 さん
(いわき市)



日向寺ツヤ子さん
(いわき市)



鈴木みどりさん
(いわき市)



有馬俊子さん
(いわき市)

トピックス

富岡製糸場世界文化遺産に登録決定

6月21日、ユネスコの世界遺産委員会は、群馬県にある日本で初めての官営の製紙工場「富岡製紙工場」を世界文化遺産に登録することを決定した。

明治5年(1872)、明治政府が日本の近代化のために最初に設置した群馬県富岡市にあった模範器械製糸場。繰糸場は長さ約140.4m、幅12.3m、高さ12.1mで当時、世界的にみても最大規模であった。主要な建物は木の骨組みに壁に煉瓦を積み入れて造る「木骨煉瓦造」で建てられた。東繭倉庫のキーストーンには「明治5年」と刻まれている。

平成21年に開催された「日本野蚕学会」はここが会場となり、当会からも5名が参加した。(会だより第6号参照)



富岡製糸場正門



御嶽山が噴火

9月27日午前11時53分頃、長野、岐阜県境にある御嶽山(標高3,067m)が噴火した。

山頂には150人以上の登山者がおり多くのけが人が出た。

噴火は2007年以来で、気象庁は警戒レベルを入山規制値のレベル3とした。

ノーベル物理学賞に赤崎、天野、中村の3氏

10月7日、スウェーデン王立科学アカデミーは2014年のノーベル物理学賞を名城大(名古屋市)の赤崎勇終身教授(85)、名古屋大の天野浩教授(54)、米カリフォルニア大サンタバーバラ校の中村修二教授(60) =米国籍=の3氏に贈ると発表した。

赤崎氏と天野氏は、長年不可能だった青色発光ダイオード(LED)の開発に成功。中村氏はその量産技術を開発し、世界で初めて製品化した。青色LEDの実現で、既に開発されていた赤と緑と共に「光の三原色」をLEDで作り出すことが可能になり、白色の照明や屋外のフルカラー大型ディスプレイなどの実用化につながった。長寿命で消費電力の少ないLEDは、世界で爆発的に普及が進んだ。



赤崎勇氏 天野浩氏 中村修二氏

常磐道 全線開通



首都圏 本県 仙台圏結ぶ

【本報】常磐道全線開通。首都圏から仙台圏までの太平洋岸を結ぶ大動脈が全線開通した。県内では、避難区域を貫く高速道路の開通で復興の加速、交流人口拡大、物流の強化が期待される。常磐道は三郷ジャンクション(埼玉県三郷市)～亶理IC(宮城県亶理町)間の総延長300.4km。全線開通は、最初の整備決まった1970(昭和45)年から45年を経て実現した。(福島民友新聞 3月2日 浪江町付近)

復興の起爆剤に

常磐道全線開通

3月1日、常磐道常磐富岡～浪江インターチェンジ間(延長14.3km)が開通し、首都圏から仙台圏までの太平洋岸を結ぶ大動脈が全線開通した。

県内では、避難区域を貫く高速道路の開通で復興の加速、交流人口拡大、物流の強化が期待される。

常磐道は三郷ジャンクション(埼玉県三郷市)～亶理IC(宮城県亶理町)間の総延長300.4km。

全線開通は、最初の整備決まった1970(昭和45)年から45年を経て実現した。

(福島民友新聞 3月2日 浪江町付近)

会員の活動スナップ





